☆すべての国の国民、議会、政府へ

——第２次世界大戦終結40周年にあたってのソ連共産党中央委員会、ソ連最高会議幹部会、ソ連閣僚会議の呼びかけ（1985年５月10日）

☆ソ連国民の不滅の偉業

——クレムリン大会宮殿での「1941—1945年の大祖国戦争におけるソ連国民の勝利40周年記念式典」におけるM・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委員会書記長の報告（1985年５月８日）

☆タス通信記者の質問に対するＳ・Ｌ・ソコロフ・ソ連国防相・ソ連邦元帥の回答

「今日のソ連邦」1985年第12号付録

すべての国の国民、議会、政府へ

——第2次世界大戦終結40周年にあたってのソ連共産党中央委員会、ソ連最高会議幹部会、ソ連閣僚会議の呼びかけ（一九八五年5月10日）

40年前、世界支配を狙ったファシズムに対する自由愛好諸国民の戦いが勝利に終わった。ヒトラー・ファシズムと日本軍国主義に対する世界史的勝利は、反ヒトラー連合諸国の国民と軍隊、パルチザン、抵抗運動の戦士、ファシズム反対者、民主主義者と愛国者、数百万の自由をめざす闘士の共通の努力によってかちとられた。

ファシズムと侵略の勢力の壊滅、隷属からの人類の救済に決定的寄与を加えたのがソ連とその軍隊であったことは、一般に認められている。

ヒトラー・ファシズムは欧州と世界の文明の存続自体を脅かしていた。第2次世界大戦は五〇〇〇万の人命を奪った。ソ連が押しつけられた戦争は、その二〇〇〇万の息子や娘たちの生命を奪った。戦争の被害を受けなかったような家族はなかった。われわれの苦痛と悲しみは永久にやわらぐことなく、兵士の未亡人、母親、遺児たちの悲嘆はいやされることはない。侵略者はわが国の国富の三分の一を絶滅した。

戦争の悲劇も、偉大な勝利の幸福も、永遠に人民の記憶にとどまるであろう。戦争のきびしく有益な教訓も忘れられない。

主要な教訓の一つは、戦火が燃え上がる前に侵略に対して決然と力を合わせてたたかわなければならないという点である。

まさにこれをめざして、ソ連は第2次世界大戦の直前にねばり強く努力したのである。

今では戦争遂行手段に質的な変化が生じた。人類の歴史全体を通じて戦争は数億の生命を奪ったが、第3次世界大戦になれば全面的絶滅の恐れがある。核の旋風が地球上を通り過ぎたなら、そのあとには生命のオアシスすら残されないであろう。

致命的なファシズムの脅威に直面して、第2次世界大戦中に社会・政治体制の異なる諸国は共通の敵に対して統一を成し遂げ、単一の全人類的目標——自由と平和のための有効な政治的、軍事的協力が可能であることを立証した。今日においても諸国民の団結は、世界を核破局へと押しやる連中の行く手をさえぎる強力な障壁となることができる。今では平和と進歩の勢力は、反動と侵略の勢力より比べものにならぬほど強大である。

戦争終結後ソ連は、新たな破局を防止し、軍縮をめざし、係争問題の交渉による平和的調整をめざす闘争で努力を惜しまなかった。一九四五年春以降、欧州諸国民は平和の条件の中で暮らしている。社会体制の異なる諸国の平和共存の原則は、国際生活において、国家間の関係の中で、ますます道を切り開きつつある。

一九七五年8月1日、欧州安全協力会議の参加諸国はヘルシンキで最終文書に署名し、その中で、「過去の関係の性格から生じる対立の克服およびよりよき相互理解にいたる」道を見定めた。諸国の集団的努力によってデタントの基礎が築かれたが、デタントは万人にとってその争う余地のない優越性と利益を示した。

勝利の40周年を諸国民は緊迫した危険な状況の中で記念している。この状況は、軍事戦略上の均衡を破壊し、ソ連、ワルシャワ条約加盟諸国に対する軍事的優位を獲得することをめざす米国とNATOの路線の結果として生じたものである。しかし世界で支配権をふるい、ソ連を含む他の国々に自分の意思を押しつけようとするもくろみは、成功の見込みがなく、あらゆる国の国民にとって危険なものである。

二度の壊滅的な世界戦争の舞台となった欧州の現情勢は、重大な不安を呼び起こしている。ここでは膨大な兵力と軍備が直接に対峙している。西欧では米国の第一撃核ミサイル兵器の展開が続行されており、戦争と戦後の発展の結果に、とりわけ欧州に現存する戦後の政治的、領土的現実に疑念をさしはさもうとする報復主義層が活発化した。

欧州内外の特定勢力は、戦後世界の基礎を築いたヤルタ、ポツダムの歴史的協定を破壊しようとするその危険な計画を断念していない。これらの協定は40年にわたって欧州の人々の安全保障の利益に確実に奉仕しており、軍国主義的、報復主義的志向に対する障壁となっている。これらの協定を侵犯しようとするあらゆる試みは、失敗の運命にある。

地球はすべての国の国民にとって、全人類にとって共通の家である。ソ連国民には他人の土地はいらない。われわれは自分たちの世界観、自分たちの生活様式を誰にも押しつけていない。〝十字軍〟や〝心理戦争〟の音頭をとる人々は、〝ソ連の軍事的脅威〟という神話によって国際世論を惑わせようとしているが、無駄なことだ。歴史や今日の現実は別のことを物語っている。ソ連は誰をも一度も攻撃したことはないが、一度ならず侵略者の襲来に反撃せざるを得なかった。ソ連国民が必要としているのは、創造的な建設や発達した社会主義社会の一層の改善のための平和的な条件である。われわれの理想、われわれの不断の関心事は、完全全面軍縮、恒久的で公正な平和である。

平和の維持は、過去も現在も共産党とソビエト国家の最高の目的である。レーニンがわれわれに遺した平和愛好的対外政策は、ソ連憲法に明記されている。それは社会主義社会の本質そのものから発している。

われわれは、戦争は宿命的に避けられないものではないと確信する。核戦争の開始を正当化するような目的などあり得ない。交渉のテーブルで調整できないような国際問題はない。緊張緩和と実務的協力は、国際生活の当然の恒常的な状態となり得るものであり、そうならなければならない。理性は無分別や狂気に打ち勝たなければならない。

ソ連は諸国民と諸国家、議会、政府に対し、宇宙での軍拡競争の防止とその地上での停止のため、核兵器の制限、削減、さらには完全廃絶のため全力を尽くすよう呼びかける。

核軍備の制限と削減の問題に関する合意の達成は、宇宙空間の軍事化の条件下では考えられない。宇宙空間の軍事化は、あらゆる方向でのとめどのない軍拡競争の触媒となり、それを新たなさらに危険な段階に、戦略的安定の大幅な弱化に導くだろう。

核兵器保有国同士の関係を一定の規準に従わせることが賢明である。われわれの見解では、それらの規準は、核戦争の防止とその宣伝の放棄、核兵器を先に使用せず、その拡散を許さず、核軍備の削減、ひいては完全廃絶に努力するという義務を規定すべきである。ソ連はそうした規準を共同で承認し、それらに義務的な性格を付与することに関して他の核保有諸国といつでも合意する用意がある。

ファシズムに対する偉大な勝利の40周年にあたって、ソ連は、自らが一方的に引き受けた核兵器先制不使用義務を確認し、それをまだ行っていない他の核保有諸国に対し、同様の義務を引き受けるよう改めて呼びかける。

ソ連側がストックホルム会議の参加者に提起した文書「相互武力不行使・平和関係維持条約の基本条項」は、緊張緩和の利益に合致している。このイニシアチブは、会議の基本目的の達成をめざしている。核軍備も通常軍備も互いに先に使用しない、従っていっさいの軍事力を互いに使用しないという義務は、提起されている条約の中核的な条項となるはずである。

われわれは欧州諸国、米国、カナダの政府に対し、中距離核をも戦術核をも含めた核兵器を欧州大陸から完全に取り除くための効果的な諸措置をとるよう呼びかける。欧州は化学兵器からも解放されなければならない。バルカン半島、欧州北部その他の地域に非核地帯をつくり、軍事費を増やさず削減することは、欧州の平和と安全の強化に役立つだろう。

ソ連は、欧州の信頼と安全強化の措置と軍縮に関するストックホルム会議ならびに中欧兵力軍備相互削減に参加している諸国に対し相互に受けいれられる合意の達成のため必要な措置をただちに講じるよう呼びかけている。

わが国は中東、中米、東南アジア、その他の地域における事態を平和的手段によって調整し、内政干渉なしに国家間の緊張と紛争の火元を一掃することを主張している。ソ連人は他の諸国民とともに、ナミビアへの独立付与、南アフリカ共和国の人種差別主義の根絶を断固要求している。

関心をもつ他の国々とともにわれわれは、公正な民主主義的基盤にもとづく国際経済関係の再構築、あらゆる形態の搾取と貿易・経済交流の政治的圧力手段としての利用の拒否の達成に努めていく。ソ連は今後とも、社会的、民族的抑圧、人種差別とジェノサイドに反対し、真の民主主義と平等、人種、性、言語、宗教に関わりのない人間の現実的な権利と自由をめざしてたたかっているすべての人々を首尾一貫して支持していく。

国連憲章の中で宣言された崇高な目的――「戦争の惨害から将来の世代を救い」「善良な隣人として互いに平和に生活する」――を実現する上での国際連合の役割と効果の一層の向上を積極的に促進することは、われわれの共通の利益である。われわれは、対ファシズム勝利40周年を記念しようとの諸国民と諸国家に対する国連のアピールを歓迎する。これは、第2次世界大戦で亡くなった幾百万の人々を追悼するゆえんとなろう。

人間の生きる権利を擁護することは、対ファシズム戦に参加した人々、そして終結後に生まれた人々の神聖な義務である。

ソ連は、全般的平和の維持に対するすべての国家、その議会と政府の高度な使命を考慮し、平和と人類の運命に対する責任を自覚して、すべての国の国民、議会、政府に対し理性の声に耳を傾け、積極的な共同行動によって核破局の奈落への転落を止め、新しい戦争への道を遮断し、核兵器の完全な廃絶を達成するよう呼びかける。ソ連は、平和に役立つものならばあらゆるイニシアチブ、あらゆる提案を検討する用意がある。

偉大な勝利の40周年が国際情勢の健全化と平和の強化をめざす諸国民と諸国家の共通の努力に新しい強力な刺激を与えることを。人類は、その未来への確信をもって20世紀を終え、21世紀に入ることができるし、またそうしなければならない。

ソ連共産党中央委員会
ソ連最高会議幹部会
ソ連閣僚会議

（プラウダ、一九八五年5月10日号）

ソ連国民の不滅の偉業

――クレムリン大会宮殿での「一九四一――一九四五年の大祖国戦争におけるソ連国民の勝利40周年記念式典」におけるM・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委員会書記長の報告（一九八五年5月8日）

親愛な同志の皆さん！　友人の皆さん！　尊敬する来賓の皆さん！

わが国民にとって戦争の4年間は長く厳しいものであったし、勝利への道は困難なものであった。ソ連の兵士、ソ連人が、正義の事業は勝利した！　敵は撃破された！　勝利はわれらがもの！　と言える明るい5月の日がやって来た。

ソ連国民とその勇敢な軍隊は、ファシスト・ドイツに壊滅的な敗北を与え、祖国の自由と独立を擁護し、欧州諸国民を解放した。ファシズムの粉砕、戦争における勝利は、救われた人類の前に社会進歩の新しい道と地上における公正で揺るぎない平和の展望を開いた変革的、世界史的意義の出来事となった。われわれの勝利は過去のものとはなっていない。これは、現在と未来に対する生きた勝利である。

ソ連共産党中央委員会、ソ連最高会議幹部会、ソ連政府は偉大な勝利の40周年にあたり英雄的なソ連国民に心からお祝いを申し上げる！　親愛な同胞の皆さん、祝日おめでとう！

この日、母なる祖国はその息子と娘、武器を手に最後まで愛国主義的義務を遂行し、勝利の春を呼ぶために全力を尽くした一人一人の勇気とヒロイズムを感じている。

前線将兵、パルチザン、地下活動家として活躍した親愛な英雄の皆さん、祝日おめでとう！　祖国と地上の生命に対するあなたがたの戦功に光栄あれ！

すべてのソ連人に大切な大祖国戦争参戦者の崇高な称号を、威厳と名誉をもって今後とももっていただきたい！

今日、国はわれわれの銃後の、兵器をつくり、金属を溶解し、穀物を育てた人々、工場や鉱山の切羽で、鉄道で、畑や農場で、研究室や設計局で勝利の時期を早めた人々の献身的な労働と古今未曾有の不屈の精神をたたえている。

親愛な同志の皆さん、祝日おめでとう！　戦時中その生命と労働を、一つの神聖な義務「すべてを前線のために、すべてを勝利のために！」捧げたすべての人々に名誉と栄光を。

参戦軍人と労働のベテランに対するソ連国民の尊敬と感謝はつきない。同志の皆さん、あなたがたは国の勝利の恩人であり、国は、四一―四五年に戦場や空前の張りつめた労働の中であなたがたが成し遂げたことを決して忘れない。

あなたがたの輝ける事業の中でソ連人の新しい世代が育てられており、勇気と不屈の精神、共産主義の理想に対する限りなき忠誠、祖国がそれを呼びかけるときすべてを克服し、すべてに耐える心構えを学んでいる。

勝利のためにわが国民が払った犠牲は膨大である。戦争は二〇〇〇万人のソ連人の命を奪った。ほとんどすべての家庭が近親者や親類を失い、戦争で焼け出された。喪失の痛み、戦没者への悲しみは決して和らぐことはない。しかし、祖国に捧げた彼らの英雄的な命がなくては、勝利はなかったであろう。

永遠の火、壮大なメモリアルと控え目なオベリスク、文学や芸術の作品、現代人とわれわれの子孫の心などの中に、最初に攻撃に立ち上がり、身を挺して砲眼をふさぎ、飛行機で体当りを行い、戦車の下に手榴弾をもって身を投げだし、水兵服で敵と素手でやりあった人々、敵の艦船を沈め、輸送列車を転覆させ、見えない戦線で勇敢にたたかった人々、戦場に決死の覚悟で踏み止まった人々、拷問にも、ファシストの拷問室や収容所にも屈しなかった人々についての追憶は永遠に残るであろう。

ソビエト祖国の自由と独立のためのたたかいで倒れた英雄たちに永遠の栄光を！

彼らを追悼するため一分間黙禱しよう。

同志の皆さん！　多くの国と国民がドイツ・ファシズムと日本軍国主義の侵略に対し統一戦線でたたかった。ソ連人は共通の敵の粉砕に際しての第2次世界大戦のすべての参加者の寄与を覚えており、高く評価している。そして自由、平和、正義をめざす闘争での彼らの功績を尊敬している。

地上のすべての誠実な人々が大切にしている偉大な歴史的出来事の40周年をソ連国民とともに盛大に祝うためにモスクワに来た外国の来賓の皆さんを心から歓迎する。

I

同志の皆さん！　先の大戦は大祖国戦争としてわが祖国の歴史に刻みこまれている。ソ連人は、わが国民が自由を守るか、それとも奴隷となるのか、民族の国家体制、言語、文化を持つか、それともすべてを失い、歴史の彼方へと消えるのか、という社会主義祖国の運命が激しい戦闘の中で決定されたことをよく理解していた。祖国に差し迫った危険のきびしさ、愛国心の巨大な力が国全体を人民の戦争、神聖な戦争に立ち上がらせた。ソ連人は偉大なレーニンの思想から力を引き出した。われわれの歴史、外国の征服者に立ち向かった国民のたたかいの英雄的なページが彼らを鼓舞した。彼らは祖国の防衛に立ち上がった。

ファシスト・ドイツとのわれわれの戦争は階級的本質において、社会主義と帝国主義の攻撃部隊との最大の軍事的衝突であった。新興ソビエト国家は――そのとき、まだ建国されて四分の一世紀にもなっていなかった――大規模な社会変革を実施していた。新しい社会体制は、その創造的な可能性をますます完全に明るみに出した。われわれには平和、平和だけが必要であった。党とソビエト政府は戦争を避けるため全力を尽くした。われわれの対外政策と外交はこのことに従属させられた。

増大する一方の戦争の危険のもとで、国は、侵攻を受けた場合に敵に相応の反撃を加えるための準備を行った。党は警戒心、ファシズムを憎む心、社会主義国家を擁護する心構えをソ連人に育てた。党は軍の信頼性の高い兵器と最新の戦闘機材の装備について絶えず配慮した。最初のころの5ヵ年計画期に創設された強力な工業をベースにして国の防衛力が強化された。

この嵐の前の時代に多くのことが行われた。しかし、さまざまな理由からわれわれは必要なことすべてを完全かつタイムリーに実現することはできなかったし、それをするだけの時間もなかった。

開戦は容赦のないものであった。残忍で狡猾な敵がわれわれに襲いかかった。敵はすでにその軍隊をテストしており、占領した欧州諸国の経済を自分のために奉仕させた。敵の総軍事・経済力は、ソ連の力を2倍上回っていた。敵は奇襲攻撃で優位に立っていた。われわれの側にも若干の誤算があった。

赤軍は激しい戦闘とともに国内深く後退した。そして、モスクワやレニングラード、ボルガやカフカズまでのこの後退以上につらいことはなかった。ヒトラーの侵攻はわが国民に空前の困難、苦しみ、困窮をもたらした。戦争の過程で、わが国に危機的な状況がつくり出された。しかし、戦争はその最初の日から社会主義社会の全生活様式から生まれる士気の巨大な力と、国の運命が一人一人の手にあるということへの深い理解を明らかにした。最も困難な時期にも国民は、勝利への確信、党への信頼やわれわれの正義の事業の勝利への確信を捨てなかった。全世界がソビエト軍兵士の不屈の精神、偉大な国民の勇気に感動し、感嘆した。

すでに四一年にはドイツの将軍たちが作成した電撃戦計画は、ソ連の地で敵が遭遇した英雄的な反撃によって抹殺された。世界は、ブレスト要塞、モスクワ、レニングラード、スターリングラード、キエフ、ミンスク、オデッサ、セバストポリ、ノボロシースク、ケルチ、ツーラ、スモレンスク、ムルマンスクの不屈の勇気を覚えている。しかし都市は、その守り手たちが英雄になって初めて英雄となる。そして、戦争はこのことをはっきりと立証した。セバストポリ防御線だけで、ドイツ軍が対ソ侵攻以前に全戦域で失った将兵と同じ位の数の敵の将兵が亡ぼされた。激しい戦闘の中でわが軍は敵を消耗させ、経験と力をたくわえ、勝つすべを学んだ。

国は持ちこたえ、事態の進展を転換させた。ソ連の戦士たちはモスクワ、スターリングラード、レニングラード、カフカズでファシストの大軍を粉砕し、クールスク突出部、ウクライナ右岸、ベロルシアやヤシク・キシニョフ、ビスラ・オーデル、ベルリン作戦で敵に壊滅的な打

撃を与えた。

その一つ一つが歴史に例を見ないこれらの戦闘の勝利を決定づけたものは何か？ 当初困難をきわめた戦争にわれわれが勝利することを助けたものは何か？

勝利の源は社会主義とソビエト的生活様式の本質と大祖国戦争の全人民的性格の中にある。偉大な試練としての戦争は、まさに国民大衆が歴史の決定的な力であることを驚くべき鮮明さをもって現実に裏付けた。さまざまな民族のソ連人が戦闘や労働で大衆的ヒロイズムを発揮し、自分たちの社会主義祖国を擁護し、守りきった。彼らを団結させ鼓舞したのが、その勇気、忍耐、不屈の精神が勝利への揺るぎなき意志の力強い手本となった偉大なロシア民族である。

戦争には幾百万人が参加したが、しかし彼らはその規模において前代未聞のこの戦闘で個性のない集団として行動はしなかった。一兵士のアレクサンドル・マトロソフからゲオルギー・コンスタンチノビチ・ジューコフ元帥にいたる偉大な祖国の戦士たちの高い個人的資質が彼らのヒロイズムの中にはっきりと現れた。

わが軍の戦旗は不滅の栄光に輝いている。10月革命によって誕生した赤軍は人民の軍隊であった。祖国への献身的な忠誠、勇気、戦闘技能の点でソ連の兵士は際立っていた。ソ連の兵士は激しい戦闘の中で、その高い道徳的資質を発揮した。われわれが戦争でこうむった膨大な犠牲、敵が行った残忍な行為に対する無分別な復讐心によって兵士の意識が鈍るようなことはなかった。勝利者としてドイツに入ったソ連人は、ファシズムに対する憎悪をドイツ人に及ぼしはしなかった。戦闘は続いていたものの、ソ連人はすでにドイツ人が平和な生活を組織することを助けていた。

大規模な、過去に例を見ない戦闘の中でわが軍の司令官たちの天分が広く明らかにされた。国民の中から頭角を現し、党によって育てられた彼らは、祖国の用兵術の良き伝統の立派な継承者、継続者であることを示した。強力で経験豊かな敵との戦闘でソ連の軍事科学と司令官の思想――戦略的予見、下した決定の創造的な性格、提起された目的の達成への粘り強さと積極性、将兵の高い戦闘精神と最新の兵器機材の壊滅的威力とを単一の合金にする能力――の優位性が明らかにされた。国全体が大祖国戦争の傑出した軍司令官たちの輝ける名を知っている。出征軍人、われわれの軍隊、すべてのソ連人が彼らを誇りとしている。

戦争の全人民的性格は二〇〇万人の民兵の創設、敵に一時的に占領された地域での地下活動家の闘争、広範な規模のパルチザン運動の中に明確な反映を見た。前線の後方、敵の後方にはもう一つの戦線、パルチザン戦線があった。復讐心に燃えた一〇〇万人以上の国民が戦闘に加わった。敵の足もとに火がついた。そして、この正義の炎で壊滅した侵略者たちの師団は一つや二つではない。

「戦争は、それぞれの民族のすべての経済力、組織力の試験である」とレーニンは指摘した。ソ連経済はこの困難な試練に立派に耐えた。工業と農業の社会主義的組織は、その優位性をはっきりと示した。きわめて困難な状況下でわれわれは、いままでは信じられないほどの期間で一五〇〇以上の大工場、かなりの物的資源・財貨を国内の奥地に移すことができた。敵の侵攻の一年後にはすでにソ連東部地区で全軍需品の四分の三以上が生産されていた。社会主義経済の優位性は、とくにその高い効率にはっきりと現れた。粗鋼の生産や石炭の採掘はドイツやドイツに占領されていた国々の三分の一――四分の一であったが、われわれは兵器機材をほぼ2倍多く生産した。

ソ連の軍事経済の効率は国家計画の確固たる権威、労働者、コルホーズ農民、技師、設計家、科学者の規律や託された任務に対する厳格な責任感、イニシアチブ、創意、大胆な発想、献身的な労働、生産の指揮者たちの組織力によって保障された。

恐ろしい危険の時代にわが国は、真に単一の陣地となった。ソ連の労働者階級は、たぐいまれなヒロイズムと不屈性を発揮した。最も困難なとき労働者の大隊は戦う軍隊の隊列に合流し、工場の操業も、敵が文字通り工場の壁のそばに立ち、弾や爆弾がそばで炸裂した時ですら中断されることはなかった。労働者階級は、その高い自覚と組織性によってソビエト社会の主導的な勢力としての役割を再度証明し、勝利のために必要なすべてのことをなしとげた。

戦争で労働者階級と農民の同盟や社会主義的農業システム、コルホーズ体制の揺るぎなさが試された。国の主要な穀倉が敵に占領され、人手や機械が足りなかったにもかかわらず、農村

の働き手たちは前線と後方に食糧を、工業に原料を供給した。コルホーズ員やソフホーズ、機械トラクター・ステーションの従業員は、敵の壊滅に全力を尽くし、祖国に対する自分たちの愛国的義務を立派に遂行した。

ソ連の知識人は、全国民と共に勝利への意欲に燃えた。わが国の学者や設計者、技師の才能と労働によって、性能の点で敵の軍事機材にまさった型の航空機、戦車、大砲、迫撃砲その他の軍備がつくり出された。それは真に強力な勝利の武器だった。

社会・政治評論の力強い文章と文学作品の鮮明な形象、愛国的な歌や映画、演劇、詩、ポスターは、人々を励まし、敵との激しい戦闘に奮い立たせた。

若さと青春を戦争に捧げた戦火の四〇年代のコムソモール員とすべての若者たちの功績は、国民の記憶の中に永遠に残るだろう。10月革命後生まれ、社会主義体制によって育てられ、幼時からその革命的、集団的モラルと精神をはぐくまれた世代が敵との戦闘に加わった。そしてその世代は臆することなく、勇敢に火線に身を投じ、戦争の混乱期のすべての試練を克服して、そうした若者を育て教育する力のある国に勝つことはできないことを示した。

前線でもそうだが、後方でもそうだった。工場やコルホーズ、ソフホーズの畑で青年男女、少年少女は手を休めずに働いた。彼らは疲れを知らずに働いた、という言い方がされる。だが、もちろん知ってはいた。しかし、たたかいのさなかにある祖国が、自分たちの労働を非常に必要としているということも知っていた。彼らの戦時下の青春、戦時下の幼年時代は、今日も何百万、何千万のわれわれの現代人の記憶の中に特に貴いものとして残っている。

われわれは深い感謝の念を込めてソ連婦人の英雄的行為を語る。確かに戦争には女性的な特質はない。しかし婦人たちは危険を顧みず、男子と共に出撃し、憎むべき敵とたたかい、兵士たちを戦場から運び出し、医療大隊と病院で彼らの世話をした。何百万人もの兵士は婦人たちの勇気と手厚い看護によって命を救われた。労働の最前線での婦人の輝かしい功績も国民は決して忘れまい。ソ連婦人は、大きな意志の力を発揮し、不滅の愛の温かみを失わず、戦時生活のすべての労苦、すべての喪失の痛みに耐え抜いた。ソ連の愛国婦人に対するわれわれの感嘆は測り知れず、彼女たちが勝利のために行ったすべてに対するわれわれの感謝の念は深い。

わが国に対する侵略を計画するにあたり、ファシストたちは、ソ連国内の諸民族を互いに衝突させ、民族的反目をあおるつもりでいた。現実はその期待を裏切った。戦争が国のすべての大小民族を侵略者とのたたかいのためにこれほど緊密に結びつけた他の例を、人類は知らない。諸民族の兄弟的な団結の中でレーニンの民族政策の英知と慧眼が十分に発揮された。偉大な社会主義的同盟は強固で揺るぎないままだった。

前線と後方での大がかりな活動を指導したのは、全ソ共産党（ボリシェビキ）中央委員会書記長ヨシフ・ビサリオノビチ・スターリンの率いる党とその中央委員会、国家防衛委員会だった。

大衆の真の戦闘本部、政治組織者となったのは各党委員会だった。いたるところで――兵士の壕やパルチザン部隊、地下活動組織で――党組織が活動した。政治部員は熱烈な言葉や個人的な手本によって戦士たちを勇気づけた。一九四二年にプラウダ紙はこう書いた。「自動小銃を手に、迷彩服、鉄かぶと姿で、先頭に立ってドイツ・ファシストの壊滅と祖国の解放という崇高で気高い目的の達成に戦士たちを導く軍政治部員の姿は、輝かしい名誉ある姿の一つとして大祖国戦争史に刻まれるだろう」

共産党員たちは、たたかいの最も危険で責任ある部署に就いた。当時、共産党員の五人に四人は軍隊や防衛企業にいた。そこには中央委員や優秀な党幹部が送られた。三〇〇万人の共産党員がファシスト侵略者との戦闘で亡くなった。五〇〇万人以上があの英雄的な時代に入党した。

レーニンの党はたたかう党となり、たたかう国民と一つに結びついた。われわれの歴史の最も困難なたたかいの時期に、党は祖国の運命に対する大きな責任の高みにあって、国を勝利に導いた。戦時中にわが党の人道的、政治的権威は強まり、共産党員の称号は国民にとってさらに高いものとなった。レーニンの党のメンバーであるわれわれも、そのことをつねに大切に思い、誇りとしていく。

戦争で勝利したのはわれわれの武器、経済、政治体制だけではない。それは、そのために革命が成し遂げられ、ソ連の人々がたたかい、死

んでいった理念の勝利だった。それは、人道主義と正義の気高い原則をもつわれわれのイデオロギーとモラルの、ファシズムの人類憎悪のイデオロギーに対する勝利だった。

ソ連軍は、自らの偉大な解放軍としての使命を見事に遂行した。ソ連軍は隷属させられている欧州に解放者として訪れ、戦争とファシズムに終止符を打ち、欧州諸国民が恒久的で確実な平和のうちに暮らせるようになることをめざしてたたかった。

勝利の日を祝うにあたってわれわれは、米国、イギリス、フランスの連合軍兵士の軍功を賛える。われわれはユーゴスラビア国民とその民族解放軍の忍耐と勇気を決して忘れまい。われわれは、占領はされたが征服はされなかったポーランドの献身的なたたかいを高く敬う。ポーランド軍部隊とチェコスロバキア軍は、ソ連領内で、続いてそれぞれの国の解放に際してわが国の戦士と肩をならべてたたかった。

パルチザンや愛国的な地下活動家たち、また戦争の最後の段階ではブルガリア軍、ルーマニア軍、ハンガリー軍部隊もヒトラー主義の粉砕に貢献した。アルバニアとギリシャの国民は占領者とねばり強くたたかった。われわれは、ドイツの共産主義者、すべての反ファシストたちがヒトラー政権に敢然とたち向かった不利なたたかいを覚えている。

ソ連の人々は、レジスタンス運動の闘士たちの勇気を高く評価している。この運動の先頭に立ったのは、フランス、イタリア、ノルウェー、デンマーク、ベルギー、オランダその他の西欧諸国の共産党だった。これらの諸国の共産党はナチの暴政に反対し、自分たちの自由と民族的独立を求めるたたかいに諸国民を奮い立たせ、団結させた。多くの共産党員が敵に勝利するために自らの命を捧げた。フランス共産党は、銃殺された者たちの党として歴史に刻まれた。

第2次世界大戦時の連合国としての義務に最後まで忠実だったわが国は、軍国主義日本の壊滅に大きな役割を果たした。われわれは、偉大な中国国民と密接な共闘態勢をとって行動した。モンゴル人民共和国の戦士たちは、われわれと共に共通の敵を積極的に攻撃した。ベトナム、朝鮮その他のアジア諸国の愛国者たちも日本の占領者たちとねばり強くたたかった。

II

同志の皆さん！　勝利がわれわれに与えてくれた最も肝心なもの、最も貴重なもの——それは平和のうちに暮らし、働く可能性である。戦争の試練が示したように、われわれの社会体制は無敵であり、その生命力は尽きることがない。

平和の時代は自らの高い要求をつきつけ、一貫した経済成長や社会関係の不断の改善、人々の労働・生活条件の改善を保障する社会の能力を厳しく点検している。

過去40年間を総括して十分な根拠をもって言えることだが、社会主義は、平和な発展の道でも自らの大きな可能性と長所を納得のいくように示した。

年長の世代の人々は、占領者から解放された地域がどんな恐ろしい破壊状況を呈していたかを——ずたずたに引き裂かれた大地や家々の焼け跡、消えた溶鉱炉、ひっそりとした炭鉱を——覚えている。約一七〇〇の町や七万の村が廃虚となった。およそ二五〇〇万人が住む家を失った。稼働できなくなった工業、農業の企業は数万にのぼった。戦火は国民の労働によってつくられた国富のほぼ三分の一をのみ込んだ。そして最も恐ろしい、取り返しのつかない損失——二〇〇〇万ものソ連人の生命は、何によっても決して測ることはできない。

社会主義の敵たちは、わが国のこうむった破壊と損害が、わが国を立ち後れさせ、西側に依存させるようになることを期待した。しかし、彼らはこの時も見込み違いをした。労働者やコルホーズ員、知識人のねばり強い献身的な労働のおかげで、敵に破壊された町や村、工場が灰の中からよみがえることができた。ソ連が戦前の生産水準を回復するのに工業はたった3年、農業は5年しかかからなかった。

これはもう一つの功績であり、ソ連の人々が困難な戦後の時期に成し遂げた創造の分野における功績だった。それは、社会主義建設の壮大な目的に勇気づけられた国民がどんな能力をもっているかをあますところなく明らかにした。以来国は、経済的・政治的・精神的発展のすべての方向で大きく前進した。

今日のソビエト社会は、高度に発達した経済の社会である。国の国民所得は、戦前の水準と比べて16倍余り伸び、工業生産高は24倍に増えた。わが国の工業は、先進資本主義諸国の2倍

の速さで進んだ。今日ソ連は、銑鉄・粗鋼・石油・ガス、セメント・化学肥料、工作機械、トラクター、穀物取り入れ用コンバイン、その他多くの種類の製品を世界の他のどの国よりも多く生産している。

生産の構造と科学技術水準に深い変化が生じた。原子力産業、宇宙・ロケット産業、エレクトロニクス、微生物工業といった新しい工業部門がつくられた。中央部とウラル、シベリアと極東、中央アジアとザカフカズなど、あらゆる地域に大規模な工業コンプレクスが形成されたか、現在つくられるかしている。送電線や石油パイプライン、ガスパイプラインの細かに枝分かれした網の目が国をおおっている。運河が何千kmも延び、かつては乾燥していたステップは面目を一新し、湿原は肥沃な土地になった。祖国の経済地図はこの数十年間に全く見違えるほどになった。

社会の主要な生産力、その創造的ポテンシャルは抜本的に変化した。ソ連は現在、高い技能をもち、高度な教育を受けた要員を擁している。労働者とコルホーズ員の職業技能や一般教養、専門知識は大幅に高まった。わが国には技師と科学者の最強の隊列がつくられている。戦後ソ連の科学と技術思想は、世界の科学技術進歩の最重要の諸方向で一度ならずすぐれた成果を誇示した。最初の原発と最初の原子力砕氷船を建造し、最初の人工衛星を打ち上げたのはソ連だった。ソ連市民ユーリー・ガガーリンが宇宙の軌道から地球を見た最初の人間だった。

今日のソビエト社会は、向上の一途をたどる国民福祉の社会である。経済の急成長のおかげで、国民経済のポテンシャルの一層の増強への配慮を弱めることなく、勤労者の需要のより十分な充足への転換を開始し、そこでも大きな成果をあげることができた。国民一人あたりの実質所得は戦前の水準を6倍以上も上回った。住宅建設も飛躍的に進展した。病院・診療所網、幼稚園・保育園網、生活サービス施設網は著しく拡大した。

今日のソビエト社会は、国民が高い教養と文化、豊かな精神生活をもつ社会である。戦前は主として筋肉労働に従事する勤労者の間では、一〇〇人中たった5人が高等ないし中等教育を修めていたにすぎなかったが、今ではその数字は82人に増えている。現代人は広い文化的、政治的視野と高い知的欲求をもつ人間である。

今日のソビエト社会は、最も大きな社会問題（複数）が解決された社会である。社会関係の全体系が新たな成熟段階にのぼり、労働者階級と農民、知識人の同盟が固まった。われわれは、都市と農村、筋肉労働と頭脳労働の間の大きな格差を克服する道をさらに前進した。大小民族の繁栄はその全面的な接近と有機的に結びついている。新しい、史上例を見ない社会的、国際主義的共同体としてのソ連国民という単一の家族に対する帰属感が、各人の意識と心の中に深く入り込んでいる。

今日のソビエト社会は、真の、現実の民主主義の社会であり、市民の品位と権利が尊重され、市民が高い責任をもつ社会である。国や集団の事業への勤労者の参加はますます幅広く積極的なものとなっており、国民の社会主義的自主管理システムが改善されつつある。

偉大な勝利から40年後のソ連は、共産主義の未来への道を着実に切り開いている強大な繁栄する国家である。

われわれの成功は一目瞭然である。しかし、発展の弁証法によれば、達成された限界は歴史の地平を押し広げ、国民の前にさらに困難で責任ある課題をつきつける。そうした課題が今日われわれの前にも立ちはだかっている。それらの本質は、社会——その経済、社会・政治関係のシステムと制度、何百万、何千万のソ連人の労働・生活条件の総体——の新たな質的状況を達成しなければならないということである。

ソ連共産党中央委の4月総会は、差し迫った懸案問題の解決を取り上げた。党はソビエト社会の社会・経済的進歩の大幅な促進を現在の最大の課題とみなしている。それは生活のすべての動き——内部条件と国際情勢——によって要求されている。問題は何よりもまず、科学技術思想の最新の成果を全面的によりどころとする国民経済を、集約的にダイナミックに発展させることである。それは、国民福祉の一層の伸びや国の経済力、防衛力の強化、発達した社会主義の徹底的な改善を可能にする基盤である。

現在の経済的発展の主な基準は、資源を最大限うまく活用した上での高い最終結果の達成である。そうした観点から現在の経済状況を評価する必要がある。短い時間に、歴史的に短期間にわれわれは労働生産性、製品の質、生産効率全体を最大限に高めなければならない。それが

今日のいやおうなしの要求である。

　この目的を達成する基本的な道は科学技術の進歩である。それを促進し、科学技術の成果を国民経済に効果的に速やかに生かすという問題をわれわれがどう解決するかは、われわれの発展テンポや資本主義との経済競争の行方を大きく左右するだろう。

　要するに、新たな歴史的段階にあるソビエト社会が直面している諸課題は、きわめて大きい。しかしわれわれは、それらを首尾よく解決するあらゆる可能性をもっており、必ずや所期の目的を達成するだろう。

　社会主義体制の長所は、新たな歴史的状況の中にあってもソビエト社会に立派に役立つものとわれわれは確信している。しかしそのためには、社会主義的経営や経済的、社会的管理の形態と方法が現在の条件と今後の発展の要求に即応していくよう、緊急の、多くの点で新しい諸措置をとることが重要である。

　われわれの管理の改善戦略の基盤にあるのは、「社会主義は**独自に**、独特のやり方で、もっと具体的に言うなら、**ソビエト的な**やり方でその前進をはからなければならない」というレーニンの理念である。生産効率の向上や質的指標の改善をできる限り刺激し、生産を科学技術進歩の促進に合わせるような形態と構造を経営機構にもたせる必要がある。

　われわれのすべての成果の保証は、国民の生き生きとした創造である。自分たちの社会主義祖国の運命に対する勤労者の深い関心、労働面、政治面での積極性――それらはつねに社会進歩を大きく促進してきたし、今も促進しており、あらゆる困難や障害の首尾よい克服を可能にした。大衆の社会的イニシアチブにできる限り十分に余地を開き、それを社会・経済発展の促進の抜本的諸問題の解決に振り向けることが今も重要である。

　社会的公正の原則の不断の実現に対する本人の確信ほど、勤労者の積極性を育てるものはない。党はそのために全力をあげていく。社会主義的原則からの逸脱やあらゆる種類の否定的現象に対ししっかりした防壁を設け、自発的で効率的な労働に対する物質的、精神的奨励の役割を高めると同時に不労所得のすべての源泉を閉ざすことは、社会・経済上、政治上、思想教育上の重要課題を解決し、多くの勤労者に所期の目標ライン達成に対する深い関心をもたせ、その自覚と規律をさらに高めることを意味する。

　定例のソ連共産党第27回大会に臨む党中央委員会は、党の政治路線が社会的発展の要求や、最も広範な勤労者層の関心と期待に十二分にこたえるものとなることをめざす措置をとっている。そのために党は、自らの活動や、党と国家の指導の形態をつねに改善している。

　今日、われわれにとってきわめて重要なのは、レーニンが教えたように、「権威の力、活力、大きな経験、大きな教養、大きな才能」をもって行動する能力である。言葉、請け合い、約束をより少なくし、現実の行動、実際的な結果、仕事における責任感、原則性、秩序、人々に対する注意、個人的な謙虚さをより多くする――これがすべての幹部の評価、その思想性と権威の主要な尺度であり、活動のスタイルと方法に対する党の要求の本質である。

　社会・経済発展の促進、確固とした普遍的な秩序、組織性と規律の強化をめざす闘争はソ連人の熱烈な承認と完全な支持を得ている。ソ連共産党中央委員会、政治局、ソ連政府は党の政策に対する国民の信頼を高く評価し、それにこたえるために全力を尽くすであろう。

　党のすべての政策は、ソ連人の創造力と能力に対する深い確信にもとづいている。大きな戦闘で敵に勝利し、戦後の復興の困難な時代に耐え、その社会主義祖国の発展においてすぐれた成果を達成した国民は、新しい歴史的条件下でも勝利し、時代がわれわれにつきつけるどんな挑戦にも立派にこたえるであろう。

　党は国が直面する課題、それを首尾よく解決する道をよく理解しており、国民の福祉を一層向上させるため経済の新たな力強い発展の保障にソ連人を動員している。ここに、それをめざしてソ連人が戦争の厳しい時代と平和的な社会主義建設の時代に献身的にたたかった事業の立派な継続がある。

III

　同志の皆さん！　今日、四五年の勝利の春に思いと心をめぐらすにあたって、われわれが次の問いを自分自身に発することは、当然である。われわれが、そしてわれわれの子どもや孫が平和と幸福のうちに暮らすことをめざしてたたかった幾百万の人々の期待は実現したのか？

　もちろん、実現した！　しかし、いま生きているわれわれのためにも、将来の世代のためにもわれわれの地球――人類の共通の家を大切にし、人々の生活から戦争をきっぱりと排除するためにまだ多くのことをやらねばならない。

　40年は、どんな尺度でも相当な期間である。時代の流れの影響は大きく、勝利後に生まれた人々が大人になり、彼らの子どもたちも成長した。多くの人々にとって第2次世界大戦は、その個人的な体験とは関係のない出来事である。しかし、戦争は、その結果と教訓が世界発展の全行程や性格、人々の意識に影響を与え続けているほど大きな遺産を残した。

　第2次世界大戦は、欧州の地や広大な海洋で最初の戦闘が繰り広げられたときよりはるか前に発生していた。その不吉な影は、ヒトラー主義の権力確立を一部の政治家たちが妨害できず、他の政治家たちが妨害しようともしなかったときに人類の上におおいかぶさってきたのである。いまやわれわれは、ファシスト支配層が武装し、侵略的な軍事力を編成し、軍事的な冒険を準備するのを誰がどのようにして助けたのかを、当時以上によく知っている。

　ドイツ・ファシズムの拡張を巧みに操作し、それを東に向けさせようとした独占資本の主要グループの試みは、政治的無責任の極致であった。ミュンヘン協定は、ヒトラーを対ソ侵攻へと執拗に追いやった連中の名前で満たされた恥辱の本に永遠に残るであろう。そして、極度の政治的硬化症にでもかからなければ、そのことを忘れることはあるまい。

　いま、三〇年代のブルジョア政治家たちや為政家たちの中の誰が心底から思い違いをし、誰が階級的利益を指針としたかは、もはやそれほど本質的なことではない。歴史はその有罪判決を変えはしない。西側諸国の〝ミュンヘン政策〟、ヒトラーの侵略の黙認は全欧州諸国民にとって重大な悲劇となった。ソ連の粘り強い呼びかけにもかかわらず、ナチスの冒険主義者たちを阻止するために統一戦線でたたかうことを拒否した連中の路線は犯罪的なものであった。

　もしも当時の西側の指導者たちが社会主義に対する敵意で目が見えなくなっていなければ防止できたはずの破局に対する責任を、時が彼らから取り消すことは決してないだろう。

　残念ながら、歴史は繰り返されている。今日も、これまで以上に、世界を奈落へと、今回は核の奈落へと追いやろうとする連中の陰謀に対する警戒心が問題になっている。人類への脅威が今日どこから生じているかを明確かつ完全に示さなければならない。ソ連は、戦前と同じく精力的にこのことを述べ、差し迫った危険について警告している。さらに、ナチズムがはなばなしく使った〝ソ連の軍事的脅威〟に関する悪意に満ちた神話が現在も使われていることからも、このことを述べねばならない。

　歴史の改変者たちが歴史をいかに書き換えようと試みても、世界の諸国民は、まさにソ連こそが警鐘を鳴らし、近づきつつあるファシズムの危険性を警告した最初の国であったことを知っている。まさに共産主義者こそが、まだ初期の段階から褐色の伝染病との的確な闘争綱領を提起した。そしてさらには、まさにソ連こそが、つけあがった侵略者の抑止をめざす一連の提案を行った。しかし、当時すべてこのことが〝共産主義の宣伝〟だと宣言された。

　破廉恥なもくろみを打ち砕き、根拠のない希望を消すためには、ほぼ西欧全土の占領、パリの占拠、ロンドンへの爆撃、真珠湾への攻撃が必要だった。ファシズムとの闘争におけるソビエト国家との協力に関する合意が明瞭な物的力をもつためには、赤軍の輝かしい勝利が必要だった。

　ファシストの脅威の拡大によって、西欧の政治家たちは世界を現実のままに見ることを余儀なくされた。反ヒトラー連合のすべての経験は、社会的本質の点で対立する国々が共通の敵との闘争において努力を結集し、相互に受け入れられる解決を見つけ出し、共通の目的の達成のために効果的に行動できることをはっきりと立証している。

　ソ連人は、連合諸国がわが国に与えた物質的援助を忘れていない。確かに、それは西側で好んで言われているほどには大きくはなかったが、しかしわれわれは、この援助を共同行動のシンボルとして評価し、それにいまも感謝している。おそすぎたきらいはあったものの、欧州における第二戦線の開設は共通の闘争への大きな貢献であった。

　連合諸国の協力の良好な雰囲気、ファシズム壊滅後の世界における新しい情勢の現実的な理解は、戦後の調整にも、テヘラン、ヤルタ、ポツダムでの連合諸国の会談の諸決定にも反映を

見た。それらの決定、さらに国連憲章や当時の他の国際諸協定は協力の精神に貫かれていた。それらは、待ち望まれていた平和の利益にこたえた領土問題を含む戦後体制の複雑な諸問題の調整を保障した。

　世界のすべての国の国民が一つの共通の敵である核戦争の脅威にさらされ、この脅威の根絶という一つの最大課題をかかえているいま、これらすべてについて思い出すことは、とくに時宜を得たことだ。

　今世紀中に帝国主義勢力は二度にわたって世界的な流血の戦争を引き起こし、それによってその階級的課題を解決し、自らの立場を強化し、その利己的な利益を達成することをあてこんだ。しかし、歴史は別のことを指図した。二つの戦争は、ずうずうしくも罰を受けないことを確信し、国際法が侵略者の思いのままになると信じていた帝国主義の冒険として始まったものだが、繰り返すが、この二つの冒険がその直接の主導者の壊滅で終わっただけでなく、そのたびに戦争を引き起こした体制そのものの長期の危機的な動揺を招いたことは驚くにはあたらない。

　ソ連国民は、祖国の自由と独立を擁護しつつ、ファシズムから世界文明を救うという偉大な国際主義的課題も解決した。ファシズムの壊滅の結果、進歩勢力、民主勢力の立場は強化され、それが一連の欧州・アジア諸国における新しい社会体制の勝利へとつながった。ドイツの地にも最初の労農国家が生まれた。ナチズムと日本軍国主義に反対し根本的な社会変革への大衆の意欲と緊密に結びついた人民の闘争の過程で、社会主義思想の魅力は目立って増大し、多くの国の共産党は強化され、強力な勢力に変貌した。

　戦後の数年間に社会主義世界体制が形成され、大きく前進し、社会主義諸国の共同体がつくられた。大地にしっかりと根づいた新しい社会制度は幾百万の人々の創造力を目ざめさせ、きわめて短期間のうちに歴史的な規模の事業を成し遂げることができた。社会主義は今日、人類の発展とその未来に巨大な影響を与える強力な社会体制として行動し、平和のきわめて強力な要因、諸国民の安全の保証人である。

　偉大な共同体の諸国は、その政策を一致させる貴重な経験と調整機構をもっている。これらの国々は国際問題において統一戦線で行動し、平和と軍縮の事業、平和共存の諸原則を一貫して擁護している。ここでは、ワルシャワ条約機構、その政治諮問委員会、同盟諸国の統合軍が特別な役割を担っている。そして、平和と安全への脅威が除去されないうちは、ワルシャワ条約加盟諸国は今後とも、あらゆる侵害から自分たちを守るために全力を尽くすであろう。全加盟諸国によって一致して承認された条約の期限延長は、このことを裏付けている。

　戦後の世界における根本的変革は植民地主義の崩壊とも関連している。かつて植民地や半植民地であったところに数十の独立諸国が形成された。これらの国々の発展が不均等で、上昇と下降、成果と悲劇を繰り返していることは、間違いない。発展途上諸国がまだまだ非常に容易でない諸問題――過去から継承した問題や新植民地主義の政策によって生じた問題を解決しなければならないことも、事実である。

　しかし、今日植民地主義体制がほぼ完全に根絶されただけでなく、多くの新興民族国家が世界政治においてますます目立って進歩的な役割を果たしていることも、事実である。これらの国々は、社会主義諸国の積極的な支持のもとで新しい、より公正な世界経済秩序をめざして粘り強い闘争を展開している。非同盟運動は現代の国際生活の重要なファクターとなった。

　同志の皆さん、このように、勝利後の40年間に世界の政治状況は根本的に変わった。

　帝国主義の支配領域は目立って狭まった。帝国主義が策謀をめぐらし、主権国家や国民に自分たちの意思を罰を受けることなく押しつける可能性は大幅に減少した。資本主義世界そのものの内部の力関係も変わった。ドイツ帝国主義のような略奪者の第2次世界大戦における敗北、軍国主義日本の敗北、かつて強力なライバルであったイギリスとフランスの弱体化は、米帝国主義をすべての重要な指標――経済、金融、軍事において資本主義世界のリーダーの地位へと押し上げた。米国が戦争で信じられないほどに豊かになった事実上唯一の大国であったことも、世界の覇権に対する米国の支配階級の要求を助長した。

　戦争の社会的、国際政治的結果が気に入らなかった帝国主義反動は、すでに戦後の最初の時期に一種の歴史的雪辱を果たそうとし、社会主義やその他の民主勢力の地歩を圧迫しようと試みた。この戦略のほこ先はソ連に向けられ、米

国の経済力と原子兵器の一時的な独占がそのテコとなった。米国の支配上層部は、この原爆独占をわれわれや他の社会主義諸国に対して軍事的・政治的圧力をかけ、すべての国の国民を威嚇する手段と見ていた。

　戦後数十年の数々の結果について述べるにあたり、われわれが真に歓迎し、支持している結果のみを見ることが正しくないのは、まさにそうした理由からだ。残念ながら、増大する一方の不安を引き起こしているものも少なからず生じている。もちろん、現代の世界は三〇年代の世界とは全く異なっているが、西側のすべての人がソ連と威嚇の言葉で話し合う試みを捨てたとはまだとても言えない。

　西側の好戦層によってもくろまれた〝冷戦〟は、第2次世界大戦の結果を〝決定し直し〟、ソ連国民、世界の進歩・民主主義勢力から勝利の成果を奪う試み以外のなにものでもない。これらの目的は、そもそも、隠されてはいなかった。これらの目的は、〝社会主義への巻きかえし〟、〝大量報復〟、〝戦争瀬戸際〟などのイデオロギーや政策に反映された。その結果、国際的な信頼は破壊され、反ヒトラー連合の枠内ではじまった諸国の建設的な協力の可能性は大幅に狭められた。

　人類への戦争の脅威の先頭にいるのが米国の軍国主義だ。米国の政策はますます好戦的な性格を帯びており、われわれが無視するわけにはいかない国際関係の不断の否定的な要因となっている。この国の支配エリートの侵略的もくろみは、国際安全の基盤である軍事・戦略均衡をぶちこわそうとする試みや、軍拡競争、なによりもまず核軍拡競争の煽り立て、危険な宇宙空間軍事化計画の中に現れている。核兵器使用の野蛮なドクトリンや構想が作成されつつあり、地球のすべての大陸に数百の軍事基地や施設ができあがっている。ニカラグアに対して国家テロリズム政策が遂行され、アフガニスタンでは宣戦布告なしの戦争が行われている。

　米国は、ある種の特権や歴史に果たす特別な使命に対する自己の要求を国際共同体に押しつけようと試みている。このことによってのみ、〝死活の利益圏〟、他国の内政に干渉し、ワシントンの気まぐれ次第で主権国家や国民を〝鼓舞〟あるいは〝罰する〟〝権利〟に対する米国の帝国的な要求も説明がつく。自国の政治的、法的義務さえ抹消している。

　現米国指導部がその蘇生に積極的に参加している西独の報復主義の危険性の増大についてもはっきりと述べねばならない。最近ボンに集まった主要資本主義7カ国の指導者たちは、第2次世界大戦終結40周年を自分流で〝祝い〟、ヒトラー・ドイツの壊滅と戦後の発展の結果生じた欧州の国境、政治の現実さえも攻撃した。親衛隊の悪党どもを忘れ、正当化すらしかねない、それればかりか彼らに敬意を表しかねない政治家たちがいたが、これは、銃殺され、焼かれ、ガス室で窒息させられた幾百万の人々に対する人類の哀悼の念そのものを侮辱するものである。

　戦争の脅威の規模を認識し、平和の運命に対する責任を自覚するわれわれは、ソ米間、ワルシャワ条約機構・NATO間の軍事・戦略均衡の破壊を許さない。われわれは今後もこの政策を堅持する。なぜなら過去がわれわれに教えたことをしっかりと、断固として会得したからだ。

　一言で言って、情勢は依然として複雑であり、危険でさえある。しかしわれわれは、軍国主義勢力を抑える十分に現実的な可能性があることを確信している。戦争や兵器のない世界は実際に達成できうるとの確信が地上の人々の意識の中で強まっている。それは、このような世界はすでにわれわれの時代に構築することが可能であり、そのためにはいま、今日積極的に行動し、たたかわねばならないとの確信である！

　この確信は、平和共存政策の経験や、二つの体制の国々の協力分野での具体的な成果の達成によって裏付けられている。そうした例は少なくない。それらの例は、ますます広範な大衆を国際関係における侵略と暴力に反対する行動へとかり立てている。社会体制に関わりなく諸国の平和で建設的な共存、同権・互恵協力が国際関係の最高の、普遍的な法則となってはじめて平和は恒久的なものになるとの理解が高まっている。反戦運動が今後も発展し、侵略勢力の冒険主義的行動をますます効果的に阻止していくことは疑いない。

　今日、唯一道理にかなった方策は、全般的に平和な未来のためにすべての諸国による積極的な協力の確立であり、民族的、国家的利益と全人類の利益との最適な関係を見つけ出せるような国際的メカニズムや制度の創設、利用、発展である。

　われわれは、さまざまな社会、政治勢力に誠

実な協力、平和のための善意にもとづいた協力を呼びかけている。課題は容易なものではなく、従って一挙に解決できるものではなくて、国家間関係における相当に高度な信頼を要する。もしもジュネーブでのソ米核・宇宙軍備交渉で目立った成果が達成されれば、事態の進展を急転できよう。以上がわれわれの確信である。

ここでは、われわれの考えでは、七〇年代の経験は真に貴重なものである。双方の安全といった微妙な問題も含めて、新しい歴史的条件下で両体制の国々の協力の良好な政治的、法的、道徳的・心理的基盤が築かれたのは、まさに当時のことだった。しかし、デタントの成果に対し西側から責任ある態度が発揮されていれば、結果はもっと本質的なものになることができたはずだ。

われわれは、デタントのプロセスを復活させることを断固支持している。だがそのことは、七〇年代に達成されたことへの単純な復帰を意味してはいない。はるかに大きなことをめざさなければならない。デタントは、われわれの考えでは、政治の最終的な目標ではない。デタントは不可欠なものだが、兵器が山積みになった世界から確実で包括的な国際安全体制への過渡期にすぎない。

ソ連はこの道を進む用意がある。核戦争の危険を排除するためあらゆる可能性を探求することが政府や責任ある国政担当者たちの最高の義務とならねばならない。ソ連は戦争のない世界、兵器のない世界を断固としてめざしている――われわれ全員にとって忘れ得ぬ記念日の今日、もう一度このことを繰り返したい。われわれは、両体制の歴史的競争の決着を軍事的手段でつけてはならないと、何度も重ねて言明している。

平和共存政策に対するわれわれの忠誠――これは、新しい社会体制の力、その歴史的可能性に対する確信の証明である。これは、すべての国と諸国民の利益に合致し、真の人道主義の精神、先の戦争中にもソ連人を鼓舞した平和と自由の理想に貫かれている。

人間の神聖な生存権を擁護し、恒久平和を保障する――これは、自由と社会進歩のために倒れた幾百万の人々に対する生きている人々の義務であり、いまの世代と来たるべき世代に対するわれわれの共通の義務である。

※　※　※

親愛な同志の皆さん！　ボリシェビキの党を先頭にし、軍服と作業服に身を固めた偉大なソ連国民こそ戦争の主役、勝利の創造者であった。

勝利の日を祝いつつ、われわれは祖国擁護の神聖な事業に生命を捧げたわが祖国のすばらしい勇敢な息子と娘たちを追悼して頭を垂れる。

勝利の日を祝いつつ、われわれは参戦軍人と労働のベテランをたたえ、ソ連人、戦士と勤労者、わが英雄的な労働者階級、コルホーズ農民、人民知識人をたたえる。

勝利の日を祝いつつ、われわれは揺るぎない兄弟的家族――ソビエト社会主義共和国連邦に団結したわが祖国のすべての大小民族をたたえる。

勝利の日を祝いつつ、われわれはソ連の兵士、われわれの勇敢な軍隊をたたえる。

勝利の日を祝いつつ、われわれはレーニン的共産党――勝利した人民の党をたたえる。

大祖国戦争におけるソ連国民の偉業が永遠に生き続けることを願ってやまない！

（プラウダ、一九八五年5月9日号）

タス通信記者の質問に対する S・L・ソコロフ・ソ連国防相・ソ連邦元帥の回答

問い　国防相同志、米国の指導者たちは、米国が〝戦略防衛手段に基づく安全保障〟に〝賛成〟しているのに、ソ連は戦略攻撃兵器の競争を進めている、と述べている。あなたはこの声明をどう評価するか？

答え　米国はつねに軍拡競争のイニシアチブをとってきた。米国は第2次世界大戦後すでに40年間、軍事的優位をかちとろうと努めている。しかしこの試みは、ソ連のタイムリーな効果的な対抗行動によってそのつど挫折した。

ソ米両国間、ワルシャワ条約機構とNATO間の現在の軍事・戦略的均衡は、社会主義共同体が歴史的に獲得した物であり、社会主義共同体の安全に必要な条件である。この均衡は今日客観的に存在していて、欺まんに訴えない限り、何人もこの事実を覆えすことはできないだろう。均衡の存在は米国の帝国主義的野望を抑え、米国が世界を支配することを許さない。だからこそ、ワシントンの指導者たちは同等（パリティー）を崩し、ソ連とその同盟諸国に対して軍事的に優位に立とうとしているのだ。

米国の指導者たちは、軍事建設の問題では方針を変えて防衛手段に目標をおくことにするなどと述べているが、先のような状態から見て、そのような声明は穏やかに言っておかしい。数々の事実は、現在の米国政府は少しも〝防衛〟について考えていないことを証明している。それどころか、米国政府は武装を解除する第一核打撃力の獲得を当てこんでおり、そのために米国はわれわれの対抗打撃力、まず大陸間弾道ミサイル（ICBM）発射サイロを、破壊しうる核ミサイルの命中精度を引き上げている。また西欧諸国に配備されているパーシングⅡ型ミサイルや、ソ連の領土近くに展開されている各種発射方式の長距離巡航ミサイルによる核奇襲攻撃の条件がつくられている。飛行中の米国のミサイルや爆撃機をできるかぎり発見されないようにするため、さまざまなカムフラージュ方法が用いられている。

ペンタゴンは新型戦略攻撃手段――二つの型のICBM、潜水艦発射弾道ミサイル（SLBM）、二つの型の重爆撃機の開発を急ピッチで進めている。C・ワインバーガー国防長官は、宇宙ミサイル迎撃システム（SBAMS）の開発によって、米国はソ連の存立を脅かす壊滅的核打撃を加える〝強力な戦略的三本柱〟を持つだろう、と公然と述べている。つまり彼が取り上げているのは、決して防衛手段に目標を置くことではなく、米国の戦略攻撃力を不断に増強することである。

いまペンタゴンは宇宙をめざして突進している。何のために？　こんどは宇宙を通じてソ連に対する軍事的優位をかちとるために、である。R・レーガン大統領のいわゆる〝戦略防衛構想（SDI）は、ひたすらカムフラージュのために〝防衛〟と称しているが、事実上それは新型の兵器である攻撃用宇宙手段の開発を目標としている。

米国の政府指導者たちは攻撃兵器を宇宙に持ち込むために、事実に反して、宇宙空間の軍事化はさまざまな軍事衛星の出現とともに始まったかのように主張し、またソ連はすでにその時から宇宙軍拡を進めていると主張している。これはウソである。双方が保有している通信衛星、航行衛星、ミサイル発射探知衛星などは攻撃用宇宙兵器ではない。ソ連も、米国も現在宇宙に

兵器を持っていない。人類にとって危険な宇宙の軍事化は、宇宙にある目標を破壊する攻撃手段、または宇宙から目標を破壊する攻撃手段が宇宙に持ち込まれる時に始まる。まさにその時から宇宙軍拡が展開されるのだ。そして米国はまさにこれに向かって事を進めているのである。

ソ連は地球上の軍拡や宇宙空間への軍拡の拡大に断固反対している。そのためにソ連はもっとも至極な合理的な事柄を提案している。すなわち双方の保有核兵器の凍結や宇宙配備兵器の開発準備の中止──さらにそれに基づく貯蔵兵器のストックの削減に直ちに移ることを提案している。ソ連は、自国の誠意と善意をより納得できる形で証明するために、一方的に一九八五年4月7日から11月まで中距離ミサイルの今後の展開を中止し、欧州における他の対抗措置の実施を停止すると宣言した。

この決定は、軍拡競争の抑制に万全を尽くすというわが国の熱意を確認している。モラトリアムから削減までの道が開かれたのに、米国は周知のように頭からソ連のイニシアチブを拒否した。こうして米国は、核軍備削減について話し合う用意があるという自国の声明の誠意のほどを人々に疑わせた。

現在ワシントンの政府関係者たちは、ソ連が宣言したモラトリアムは順守されていないかのような無責任な発言をしている。ずばり言って、これは故意の悪質なデマである。ソ連は自分の言ったことに忠実である。ソ連はモラトリアムの有効期間中、ソ連欧州部にミサイルや航空機などの中距離兵器を一つも増強していないし、増強しないだろう。

問い 米国政府は、ソ連がモラトリアムに関する提案を採択したのは、戦略攻撃兵器と中距離核手段の分野での〝ソ連の優位を固定化〟するためであるかのように主張している。実際に今日このような優位は存在するか？

答え 戦略攻撃兵器でも、中距離核手段でも、〝ソ連の核の優位〟は全くない。実在するのは、これらの兵器におけるおおよその均衡である。ワシントンは前例のない大軍事計画と軍拡競争を正当化し、宇宙の非軍事化と核兵器の抜本的削減についてジュネーブで話し合いたくないことを隠すために、事実を歪めているのである。

戦略兵器の分野でのソ米間の均衡はSALTⅠ、SALTⅡの合意の作成のさいに双方によって綿密に調査され、承認された。現在ソ連は米国より、運搬手段を若干多く持ち、米国の方は核弾頭数がソ連より多い。だが全体としておおよそ均衡がとれている。

米統合参謀本部はおおよそのパリティーを確認しており、米議会への報告（一九八四年）の中で、「目下のところ米ソ両国間におおよその核均衡が存在する」と述べている。ワシントン政府自体の公式資料によれば、いまソ米両国の地上および海上発射の弾道ミサイルの核弾頭数はほぼ同じである。しかし米国にはソ連よりもはるかに多くの重爆撃機があり、従ってそれに装着する核弾頭数の不平等について言うなら、それは米国側に有利になっているのだ。

中距離核手段ではNATO諸国は、現在運搬手段（ミサイルと航空機）でも、これらの運搬手段によって一回に運ばれる核弾頭数（ソ連には八五〇の運搬手段と約二〇〇〇の核弾頭があり、NATOには九九〇の運搬手段と三〇〇〇以上の核弾頭がある）でも、優位を保っている。

ではワシントンは、現実をどのように歪めているか？ NATO側は英国とフランスの中距離ミサイルと航空機、米国の空母搭載機（合計──約四五〇の運搬手段とほぼ一五〇〇の核弾頭）を計算に入れていない。ところがソ連に関してはソ連東部に配備されている欧州の戦力バランスに関係のない手段さえ含めて計算している。

核パリティーに関する事実は以上のようなものだ。こうした条件のもとで、双方の貯蔵核兵器や、攻撃用宇宙兵器の研究活動を含めた開発に対するモラトリアムの設定は、軍拡競争抑制から見て時宜にかなった、効果的な、正しい措置であり、1月に達成された合意の精神に完全に合致している。このような措置によって、情勢の悪化を防止し、核軍備削減問題の解決に取りかかることができるだろう。

問い ワシントンの指導者たちは宇宙ミサイル迎撃システム開発計画を〝人道的なもの〟と呼び、このシステムが弾道ミサイルを〝不必要なもの〟にし、人類を核兵器から救うと主張している。米国の〝スターウォーズ〟計画の真の意味は何か？

答え 米国の宇宙計画が〝人道的〟だとする主張は、世論をだまし、人類にとって危険なこの計画から世論の注意をそらすためのものだ。

実際にワシントンは何をもくろんでいるのか？ 米国の上空に対ミサイル・シールドをつくり、同時に第一撃戦略攻撃兵器や、地上、海上、大気圏内、宇宙の目標を破壊するための宇宙配備の新しい戦略戦力を展開することを狙っている。もし米国のこのような計画が実現すれば、ワシントンの戦略家たちが、宇宙の対ミサイル・シールドで掩蔽（えんぺい）されて、報復を受けることなく、ソ連やその同盟諸国に核兵器や宇宙兵器を使用できるかもしれないとの誘惑にかられるのは、想像にかたくない。ペンタゴンの構想によれば、対ミサイル・シールドが米国の先制核攻撃から生き残ったソ連のミサイルを飛行中に〝撃破する〟から、ソ連の報復攻撃を受けないというのだ。

これに関連して〝人類を核兵器から救う〟とかいう米国政府の発言はあからさまなデマゴギーである。米国政府が主張しているように、もし〝スターウォーズ〟が核兵器の廃棄への道であるなら、なぜ米国は巨大な規模で戦略攻撃兵器を増強し、その他のますます新しい核手段をつくり、西欧にパーシング型ミサイルや巡航ミサイルを展開し、一万七〇〇〇の新型核弾頭を製造するのか？ 双方の保有核兵器を凍結し、削減へ移るのが良識というもので、ソ連はまさにこのことを提案しているのである。

しかし、ワシントンは全く別の行動をとっている。ワシントンはこう主張している──今日では戦略核兵器を今後とも展開する必要があり、そのほかに、宇宙を軍事化し、宇宙ミサイル迎撃システム、すなわち攻撃用宇宙兵器を開発することが肝要だと。その後、〝何十年も先になる〟が、それらが実現した後で、はじめて核軍備の削減あるいは廃絶が可能となるというのだ。

核兵器の廃絶には、まずそのストックを何倍にも増やす必要があるとの論理であり、この論理に従えば、核軍縮の道は戦略攻撃兵器の増強、宇宙の軍事化を通るしかなく、おまけに何十年もかかるというのだ。それ以外の道はまるでありえないかのようである。

では何のためにこんなことが行われているのか？ それは人々をだまし、保有核兵器の削減に関する緊急かつ有効な措置の必要から人々の注意をそらすためである。その場合このような方針がもたらす危険な結果が世論に念入りに隠されており、一九七二年の無期限の対ミサイル防衛（ABM）システムの制限に関するソ米条約の土台におかれた、攻撃兵器と防御兵器との間の客観的に存在する相互のつながりが隠されている。2国の一方が大規模な対ミサイル防衛システムを開発することは、この相互のつながりを断ち切り、戦略的情勢を不安定にし、他方は、戦略攻撃兵器の増強か、またはミサイル迎撃手段の補充、いやきっとその両方の措置によって、やむなく事態を元に戻さねばならなくなる。この点が黙殺されているのだ。

換言すれば、米国が開発する宇宙ミサイル迎撃システムはあらゆる方向での軍拡計画を促進し、国際安全を破壊する、というのが真実である。この結論はM・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長がプラウダ紙編集者との一問一答の中で明確に定式化している。「核兵器の登場は通常兵器を排除しなかったし、核軍備と通常軍備の双方の軍拡競争の激化を招いたにすぎない。それと同様に、宇宙兵器の開発も、軍拡競争がますます激烈なものになり、新たな領域に広がるというたった一つの結果をもたらすにすぎない」

軍事的見地から米国の〝スターウォーズ〟計画は、米国の核戦略の切り離すことのできない一部である。この計画の真のねらいは、つまるところ報復されずに核攻撃をする可能性を得ること、ソ連、その他の諸国にたえず核による脅しをかける条件を確保しておくこと、である。米国が核先制不使用の義務を引き受けることを断固拒否していることから見ても、このような米国の意図は平和への現実的な脅威となっている。

問い 米国政府は、〝スターウォーズ〟計画は一九七二年のABM制限条約によって禁止されていない科学研究にすぎず、ソ連も同様の研究を行っているなどと主張している。この件について話していただけないだろうか？

答え 事態は目下のところ無害な研究にとどまっているというホワイトハウスの主張は、世論をあざむくためのものである。原爆もまた〝マンハッタン〟計画による研究の結果であった。これが広島と長崎の住民にどういう結果となって現れたかは周知の通りだ。それ以来、全世界は核の脅威の下で暮らしている。〝スターウォーズ〟計画は人類にさらに大きな危険をもたらすものであり、その計画を科学研究活動を含めて禁止することが必要だ。

〝研究〟は一九七二年のABM制限条約で容認されているかのようにいうワシントンの口実は、説得力がない。この条約の第5条は宇宙発射のABMシステムと構成要素の建設、実験、配備を禁止している。ところが米国で行われている宇宙配備の諸要素を持つABMシステムの開発を目的としたいわゆる〝研究〟は、今ではもう科学研究の枠を越えているのだ。

攻撃用宇宙兵器のある一定の実験用サンプル――各種レーザー兵器、電磁砲、迎撃ミサイル、衛星迎撃システムが開発されつつある。これらは皆、宇宙ミサイル迎撃システム（SBAMS）の構成要素となるものであり、大統領顧問のキーワースの表現によれば、〝最終システムのれんが〟というべきものである。これらの〝れんが〟を開発する研究作業は、一九七二年の条約にずばり違反しているので、中止または禁止されなければならない。

研究活動の終了の暁、米国は大規模な宇宙ミサイル迎撃システム展開をやめることができるかのようにいっているが、この保証は不真面目なものだ。10年間の予定研究費六〇〇億ドルが、攻撃用宇宙兵器の開発が可能か否かの理論問題を解決するためにだけ必要などとはとても考えられない。C・ワインバーガーは本年1月13日のCBS放送とのインタビューで「私は研究段階でも、展開段階でも戦略防衛をやめることは不可能だと考えている」と本音をはいた。これにはコメントなど無用である。

さてソ連における宇宙分野の研究について述べよう。わが国では軍事分野のものも含めて科学研究活動が行われている。しかし、それは攻撃用宇宙兵器の開発を目的としたものではなく、早期警戒、偵察、通信、航行の宇宙システムを改良するためのものだ。われわれは攻撃用宇宙兵器や国の領土のミサイル迎撃防衛システムをつくらない。ソ連は一九七二年の無期限のABM制限条約を堅持している。

問い　米国の宇宙ミサイル迎撃システム開発計画は、あなたが説明されたとおり、報復を受けずに対ソ核攻撃をすることをあてこんだものだが、ではソ連はどのような性格の対抗措置をとるのか？

答え　米国が宇宙の軍事化を始め、それによって現在の軍事・戦略バランスが崩れれば、ソ連としては、均衡回復のために対抗措置をとる以外に道はない。そしてこの措置は、防御兵器の分野でも、攻撃兵器の分野でもとられるかもしれない。もちろんソ連は、ワシントンの為政者たちがソ連にとらせようとしている手段ではなくて、ソ連の防衛力の利益に最も合致する手段をとりうる。われわれの措置が、ソ連とその同盟諸国に対してつくられる恐れのある脅威に対応するものになることは間違いない。このことはつよく断言しておく必要がある。

宇宙の軍事化を狙う米国の方針は、世界の軍事・政治情勢に極めて否定的な影響を与え、核軍備の削減問題の解決を、不可能にするとは言わないまでも、困難にする。攻撃用宇宙兵器の開発は、米国自身の安全はもちろん、その同盟諸国の安全の低下となってはね返ってくるだろうし、必ずはね返ってくるに違いない。〝スターウォーズ〟計画の主唱者たちやこの挑発的計画に加担したがっている者たちは、こういう羽目になることを忘れるべきではない。

ソ連は、最高首脳を含めて何度も声明してきたことだが、米国やNATO諸国に対する一方的優位なるものの獲得をめざしていない。われわれに優位など必要はない。なぜならわれわれはこれらの国々を脅かすつもりはないし、自分の意思を押し付ける気などなく、これらの国と平和のうちに暮らし、正常で良好な関係を維持することを望んでいるからだ。われわれの目的は、軍拡競争の停止、世界全体の核兵器の完全廃絶である。

米国がジュネーブ交渉におけるソ連の立場を理解し、相互性で答えることを望みたい。米国は、ワシントンがもくろむ軍事計画に大きくドアを開く、ソ連が到底受けいれられないような協定を、ソ連に押し付けることを断念しなければならない。M・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長が述べたように、「われわれは米国政府に対し、ソ米両国の政策路線が敵意と対抗ではなく、相互理解の探求や平和的発展をめざしていることが、万人に――ソ米両国や他の国々にわかるように、事態を運ぶことを提案している」。

（プラウダ、一九八五年5月6日号）